

## 近代鎌倉における古都観光の継承状況に関する研究

A Study on the Succession of the Ancient Capital Tourism in Modern Age Kamakura

押田 佳子\*

Keiko OSHIDA

**Abstract:** This study aims to clarify the traditional 'the Ancient Capital Tourism' in Kamakura and its succession, paying close attention to the historical tourism resources, scenic landscape resources, tourism routes and sojourn hubs. In this paper, a local topography and three travelogues written by tourists, was focused on as a reference for modern tourism. Thirty-nine historical tourism resources, but not Kanazawa, were to be seen in the area; therefore it was presumed that Kanazawa was dropped from the tourism region belonging to Kamakura. And then, these tourists didn't draw up travel plans because they followed regional guides. As for the scenic landscape resources, view point of early modern changed view object of modern time. On the other hand, descriptions of 'Kanazawa' which were often seen in the descriptions of Kamakura tourism until the early-modern times were seldom seen, and it was supposed that those two areas had been cut off from the Kamakura tourism region that they used to belong to by the laying of the railway and readjustments by the administration. Therefore, the modern tourism period seems to be a time when the 'Ancient Capital Tourism,' established in the mature period of early modern tourism, was in decline as a result of the alienation of the scenic landscape resources and sojourn hubs from the historical tourism resources.

**Keywords:** Kamakura, tourism, travelogue, the ancient capital, modern age, the historical landscape resources

**キーワード:** 鎌倉, 観光, 紀行文, 古都, 近代, 歴史的観光資源

### 1. はじめに

わが国を代表する歴史的観光都市鎌倉は、その豊富な歴史的遺産を前面に押し出した古都観光を進めている<sup>1)</sup>。この鎌倉における古都観光の歴史は古く、江戸時代に遡る。

古都観光は、1685年に刊行された徳川光圀編纂の歴史書『新編鎌倉志』に係る現地調査において、鎌倉幕府崩壊後埋もれていた多くの歴史資源が発掘され、それが同書とともに広く普及したことによって発展したといえる<sup>2)</sup>。同書は多くの旅行者にガイドブックとして携行され、その旅行者たちによって紀行文に歴史的・景観的観光資源や滞在拠点、観光経路などが記されたことで古都であった頃の面影を辿る観光形態が後世に継承されるようになった<sup>4)</sup>。

元禄、化政文化期になると十返舎一九や歌川広重など著名人の活躍によって近世徒歩観光の最盛期を迎えた<sup>5)</sup>。

近代になると、明治維新後の文明開化に伴い、わが国には多くの西洋文化が輸入されるようになった。鎌倉も例外になく、1870年頃には人力車が普及し、1889年には国鉄横須賀線鎌倉駅(現・JR鎌倉駅)が開業、1910年には江之島電気鉄道小町駅(現・江ノ島電鉄鎌倉駅)が開業した<sup>6)</sup>。また、1880年にエルウィン・ベルツが鎌倉を保養地として適地であると評し、さらに1884年に医師の長と専齋が由比ヶ浜を海水浴の適地と称したことなどによって、鎌倉の沿岸域には保養・療養の場としての期待が集まり、1885年には由比ヶ浜海水浴場が開設、1887年には日本初のサナトリウムである海浜院が由比ヶ浜に開院した<sup>7)</sup>。

以上のような近代交通および施設の導入は、近世まで継承されてきた鎌倉の古都観光に大きく影響し、観光形態の変容を余儀なくされたと考えられる。

そこで本研究では、近代鎌倉を訪れた旅行者による地誌や紀行文に着目し、その記述より、近代鎌倉の観光形態および近世以前の古都観光の継承状況を把握した上で、現代観光において目指すべき「古都観光」のあり方について考察することを目的とする。

### 2. 研究の位置づけ

鎌倉観光を扱った研究についてみると、近世については徳川光圀一行により、のちの鎌倉観光の資源となる歴史資源、景観資源が発掘されたプロセスを明らかにした研究<sup>2)</sup>や複数の紀行文より鎌倉観光を網羅的に捉えた研究<sup>4)</sup>、鎌倉観光最盛期に著名な戯作家・十返舎一九が記した『金草鞋(かねのわらじ)箱根山七温泉江ノ島鎌倉廻(以下、金草鞋)』に着目し、観光経路上で一九が用いた景観鑑賞の技法等を検証した研究<sup>5)</sup>がある。これらの研究はいずれも旅行者が残した文献資料をもとに近世鎌倉観光の実態と変遷をとらえたものである。

近代については、近代史の視点より鎌倉の別荘・保養地文化の実態を明らかにした研究がある<sup>7)</sup>。しかしながら、近世以降の鎌倉観光の継承状況については十分に言及されていない。

以上をふまえ、本稿は近代における古都観光の実態を明らかにし、かつ近世以降の観光資源の継承状況を把握することで、鎌倉における「古都観光」を明確にし、今後の持続可能な観光計画への展開を目指すものである。

### 3. 研究方法

#### (1) 分析の視点

観光を構成する要素としては、出発地から観光地に至る「観光経路」、観光の対象そのものである「観光資源」、休憩や宿泊の場となる「滞在拠点」が挙げられる<sup>8)</sup>。本稿では、「観光資源」を古都に起因する「歴史的観光資源」とそれを視点場あるいは視対象とする眺めとしての「景観的観光資源」に区別し、「歴史的観光資源」、「景観的観光資源」、「滞在拠点」、「観光経路」の4項目を分析の視点として取り上げた。

#### (2) 調査方法

本研究では、旅行者の視点より近代における「古都観光」を捉えるため、近代に執筆された地誌および紀行文を対象に文献調査を行った。調査結果は前項の分析の視点を踏まえ、以下の4項目

\*日本大学理工学部

表一 調査対象文献

文献名	刊行年	筆者
鎌倉紀行	1876	平野 栄
鎌倉日記	1889	奈良原時子
散文韻文 雪月花	1894/1896	大和田健樹
現在の鎌倉	1912	大橋良平

について分析した。

歴史的観光資源：「古都」のいわれのある観光対象

景観的観光資源：視点場および視対象となった観光対象

滞在拠点：宿泊拠点となる「宿屋」「別荘」、旅行者が足を一時的に休める「茶屋」

観光経路：「鎌倉入」および「鎌倉出」の地点に観光資源と滞在拠点を加えた行程

なお、『現在の鎌倉』は地誌であることより、歴史的観光資源のみを分析することとする。

(3) 調査対象文献

調査対象文献を表一に示す。調査対象文献は、鎌倉に関する地誌および紀行文を網羅的に集約している『鎌倉市史近世近代紀行地誌編』<sup>10)</sup>に記載された地誌および紀行文のうち近代に記された4文献<sup>11)~14)</sup>とする。

このうち地誌としては、1912年に長谷に立地する大旅館・三橋屋に宿泊していた大橋良平によって記された『現在の鎌倉』を対象とした。本書は執筆当時既に発刊されていた他の案内書とは趣旨を異とし、名勝古址の詳細な説明に加え、近代鎌倉の発展状況についてまで言及している。そのため、交通機関や賃貸賃料、さらには当時鎌倉中に建設された別荘の所有者や分布、学校、営業一覧、広告などが掲載されている。

紀行文としては、1876年に明治政府の官員とされる平野栄によ

表二 『現在の鎌倉』における歴史的観光資源<sup>15)</sup>

1 扇ヶ谷	20 十六の井	39 光觸寺	58 八坂神社	77 星月夜井
2 上杉の舊館址	21 海蔵寺	40 十二所	59 延命寺	78 由比ヶ浜
3 景綱の邸跡	22 化粧坂	41 大倉	60 乱橋材木座通	79 大町原
4 鶴岡八幡宮	23 寿福寺	42 雪の下	61 光明寺	80 六地藏
5 段葛	24 源氏山	43 宝戒寺	62 別願寺	81 和田一族の塚
6 鏡の井	25 薬師堂	44 小富士山	63 安養院	82 光則寺
7 巨袋坂	26 覚園寺	45 頼朝屋敷	64 松葉谷	83 星の井
8 円応寺	27 瑞泉寺	46 滑川	65 妙法寺	84 極楽寺坂
9 建長寺	28 大塔宮	47 腹切やぐら	66 安国論寺	85 極楽寺
10 亀ヶ谷	29 荏柄天神社	48 小町氏神恵比寿社	67 長勝寺	86 日蓮袈裟掛松
11 長寿寺	30 大江廣元の墓	49 日蓮上人の古跡	68 本奥寺	87 稲村ヶ崎
12 山の内	31 島津忠人の墓	50 大巧寺	69 補陀落寺	88 七里ヶ浜
13 英勝寺	32 源頼朝公の墓	51 本覚寺	70 元八幡	89 腰越
14 明月院	33 杉本寺	52 夷堂橋	71 啓運寺	90 片瀬
15 道灌の邸跡	34 報国寺	53 比企ヶ谷	72 向福寺	91 満福寺
16 浄智寺	35 熊野社	54 妙本寺	73 大仏	92 龍口寺
17 東慶寺	36 浄妙寺	55 名越	74 長谷観音	93 江の島
18 円覚寺	37 足利公方屋敷	56 大町通り	75 日朗土牢	94 江の島神社
19 薬王寺	38 明王院	57 鎌倉街道	76 権五郎神社	



図一 近代紀行文における歴史的観光資源の分布

って記された『鎌倉紀行』、1889年に華族女学校の学生・奈良原時子によって記された『鎌倉日記』、1894年と1896年に国文学者の大和田健樹によって記された『散文韻文 雪月花』の3文献を対象とした。いずれの文献もそれぞれの筆者が休暇中に鎌倉を来訪・滞在した際に記録されたものである。

本研究では、以上4文献が鎌倉に関する近代史研究において重要な参考文献<sup>70)</sup>として取上げられていることより、掲載情報の信頼性が極めて高い文献であると判断し、調査対象文献に選定した。

4. 近代鎌倉における観光形態

(1) 歴史的観光資源

表二に『現在の鎌倉』における歴史的観光資源の一覧を、表三に近代紀行文、図一に近代観光における歴史的観光資源の分布を示す。

表二より、『現在の鎌倉』に掲載された歴史的観光資源は「扇ヶ谷」をはじめ94件であり、これらが「4鶴岡八幡宮」のように現在の鎌倉市域に分布するものと、「93江の島」など江の島に分布することを捉えた。

これは既往研究<sup>25)</sup>における『鎌倉日記(徳川光圀編纂, 1672)』の173件、『金草鞋(十返舎一九, 1833)』の110件と比べ少なく、分布についても、近世以前にみられた「江の島-鎌倉-金沢」の観光領域から縮小していることが窺える。このことより、近代以降、金沢が鎌倉観光に帰属しなくなったと考えられる。

この要因として、藤沢、鎌倉には19世紀末にはすでに国鉄(東海道線、横須賀線)が開通し、さらに20世紀初頭には鎌倉海岸沿いに江の島電気鉄道が開通したことで鎌倉-江の島の範囲には、

表三 近代紀行文における歴史的観光資源<sup>15)</sup>

鎌倉紀行		雪月花(大和田健樹)	
1876年(2泊3日)		1894年(29泊30日)	
1 片瀬村	2 江島	3 江ノ島神社	4 竜ノ口
5 日蓮上人の旧蹟	6 腰越村万福寺	7 七里が浜	8 行合川
9 稲村が崎	10 袖が浦	11 大館又次郎源宗武主従十一人墓ト題したるもの	12 権五郎景政
13 長谷寺	14 大仏	15 初瀬村大威山清淨泉寺	16 鶴岡八幡祠前
17 雪ノ下村	18 頼朝の邸跡	19 大塔宮護良親王の社	20 鶴岡八幡宮
21 建長寺	22 山之内村	23 五輪塔	24 円覚寺
		1896年(19泊20日)	
鎌倉日記(奈良原時子)		1 鶴が岡	
1889年(14泊15日)		2 小坪	
1 鶴が岡八幡の神社		3 光明寺	
2 大塔宮			
3 初瀬の観音			
4 大仏			
5 女谷の観音			
初瀬の観音			
6 星月夜の井			
7 日蓮の袈裟掛け松			
8 行合橋			
9 七里が浜			
10 江の島			
11 岩屋の弁在天			

東京方面からの旅客を多く運んでいたのに対し、金沢には1930年に大師電気鉄道（現・京浜急行電鉄）が開通するまで、鎌倉から金沢方面に直接向かう経路が存在しなかったことが影響したと考えられる。

表-3より、近代紀行文における歴史的観光資源をみると、『鎌倉紀行』で24件、『鎌倉日記』で11件、『雪月花』で23件、全40件が抽出され、これらは全て「鶴岡八幡宮」とその周辺の鎌倉中心地に集中して分布していた（図-1）。

このうち、3文献全てに共通して記述がみられたのは「鶴岡八幡宮」、「江の島」、「七里ヶ浜」の3件であった。

これら近代紀行文における歴史的観光資源の掲載件数は、『現在の鎌倉』の94件をはるかに下回るものとなっている。

この要因の1つとして、旅行者の探訪意欲の変化が挙げられる。

具体的には、『鎌倉紀行』において「相模の名所を細やかに探らば、二日の日力を費やさずには叶はずとも、最も著名なる処のミを問ひたまはんに、第一二権五郎景政遺跡、第二三長谷寺の観音、第三四大仏、第四鶴岡八幡宮、第五二大塔宮、第六建長寺、第七二円覚寺、など見たまはゞ、それにて足りてんといへり。」とあり、近世の旅行者が過去の資料を参照しながら観光資源を自ら訪ね歩いたのとは異なり、近代では、地元の案内人の薦めに従うがまま赴くに留まっていたことが挙げられる。

以上より、歴史的観光資源では、件数が近世に比べ減少したことに加え、鎌倉への旅行者がこれらを訪ねる件数も大幅に減少したことが明らかとなり、この要因として金沢地区が欠落したことに伴う観光領域の縮小、旅行者が地元の案内人の薦めに従うがまま赴くに留まっていたことが明らかとなった。

これらの傾向より、近代鎌倉観光における歴史的観光資源が、鶴岡八幡宮などの有名な拠点のみが注目されるような観光形態であったことを捉えた。

## (2) 景観的観光資源

表-4に近代観光における景観的観光資源を示す。

表-4より、景観的観光資源は鎌倉紀行で6地点7件、鎌倉日記で1地点2件、雪月花で9地点9件みられ、全体で16地点18

件が抽出された。このうち歴史的観光資源は「江の島」、「大仏」、「鶴岡八幡宮」など6地点であった。

視線の動きに着目すると、視点場としては、「江の島」や「七里ヶ浜」など歴史的観光資源が6件、『鎌倉紀行』における岩本楼をはじめ宿屋・茶屋など滞在拠点が8件、『雪月花』における「極楽寺切通-七里が浜間」のように視点場が明確でないものが4件みられた。

滞在拠点を視点場とするものが最も多い要因としては、近代の鎌倉を別荘地や保養地として避暑・避寒に訪れる旅行者が多かったため<sup>78)</sup>宿屋などが視点場になりやすかったと考えられる。

視対象としては、「稲村ヶ崎」、「由比ヶ浜」、「江の島」などの歴史的観光資源を宿屋や道すがら眺める記述がみられた。例えば、『雪月花』の「前田喜八郎」において「右には稲村ヶ崎まぢかく立ち、左には三浦三崎の山々まで呼べば応ふるの絶景あるをや（略）」とあり、宿屋の窓より近景に稲村ヶ崎、遠景に三浦三崎の山々などを望む様子が捉えられた。

視対象の多くはいずれも山や岬などの地形要素であり、古来より不変なものである。近世観光<sup>29)</sup>においても、富士山や伊豆大島など遠景への眺望を捉えていたことより、視対象については近世観光における景観的観光資源がそのまま継承されたと考えられる。

以上より、景観的観光資源では、視点場としては宿屋などの滞在拠点多く抽出される傾向がみられ、その要因に近代以降の別荘や保養地文化の台頭があることを明らかとした。一方、視対象については山や岬などの地形要素を眺望する様子がみられ、近世観光が継承されていることを捉えた。

### (3) 滞在拠点

表-5に近代観光における滞在拠点を示す。

表-5より、近代観光の滞在拠点のうち宿屋として『鎌倉紀行』の「堺屋平十郎邸」、『鎌倉日記』の「海浜院」、『雪月花』の「前田喜八郎」、「材木座光明寺の前」の4件が抽出された。

食事・休憩の拠点については、『鎌倉紀行』における「岩本楼」と「角屋」、『鎌倉日記』における「ゑびす屋」の3件が抽出された。これらのうち「岩本楼（近世では岩本院、近代に改称）」、「恵

表-4 近代観光における景観的観光資源<sup>15)</sup>

	視点場	景観の記述	視対象
鎌倉紀行	江島	山中山茶花の大樹多し。皆花をひらき、いとうつくし。	江の島山中
	江ノ島神社	山上より四方を眺望めば、渺茫たる蒼海は遠く天に接はり、豆相の諸山環列り、海おもしろいなどいふもおろかなり。	渺茫たる蒼海、豆相の諸山環列、他
	岩本楼	(洞窟から外に出て)渺茫たる大海を見渡したときの心地よさ、またたとふるにものなし。	海方向
	詳細不明 (浜海に沿ひつゝゆく。)	三層の楼閣高く空に聳え、風致最も佳絶。(略)遠くより望めば粉壁暗窓碧海の間に出没し、画家の散水に駭駭たり。	三層の楼閣、遠近の山色、海方向
	大仏	(浜海に沿ひつゝゆく。)渺茫たる荒海はるかに霞天深りて、遠近の山色黛眉の如く、波間にあらわれたる景色いとおもしろし。	海方向
	鶴岡八幡祠前	由井浜を望めば、景色すこぶるよし。都にもおとらぬ光景なるは王仁の民に露ひたるをトすべし。	由井浜 雪ノ下付近
鎌倉日記	七里が浜	(行合橋一七里が浜を行く)江の島、稲村が崎など、打ち渡る気色いとめでたし。 右の方は小つぼとか云ふ。浦回の見渡しいと広くて、海原の果てに、遠く伊豆の大島も見ゆ。その島くちに、三原山といふあり、峯より噴き出づる煙の雲の棚引ききたる、目路いと遙かなれば、打ち向ふ心も広くのびやかになる心地す。	江の島、稲村が崎、他 海方向、伊豆の大島、三原山、他
雪月花	前田喜八郎	右には稲村が崎まぢかく立ち、左には三浦三崎の山々まで呼べば応ふるの絶景あるをや。況んや前は漁村を隔てゝ烟波万里の海天を望み、後は晩金霞を破るの幽趣ある山寺を背おひたるをや。斜陽波を射て吟情まつ孤帆の辺に在り。	稲村が崎、三浦三崎の山々、烟波万里の海天、他
	極楽寺切通-七里が浜間	見よあれに浮かびたるが江の島よといえ、一しほの勇気を鼓して	江の島
	岩屋におりんとする 処の茶屋	見おろす方は岩屋の道にて、もぐりどもの身を逆さまにして飛びこむも、唯目の前なり。遠くは烏帽子岩を中にして、右の方には大磯より箱根のあたり、左には三崎の鼻より大島まで、霞みながらに指さるゝこそ心ゆく限なれ。	烏帽子岩、大磯、箱根、三崎の鼻、大島、他
	不明	長き日を此島に送りて帰らんとすれば、(略)七里が浜も見えずなりぬ。(略)	七里ヶ浜
	建長寺内の半僧大権現 うしろの一の茶店	眺望打開けたり。是に一休みして茶をもてくる老婆に問へば、あれなるは戸塚・程谷、右の端の平たきところが神奈川なりなど、指さし示す。	戸塚、程谷、他
	浄光明寺	(山頂にて)遠くは由井が浜より三浦のかたまで、たゞ一望の下に來りて、帰帆の影と夕波の声と、今も歌人の幽魂を慰むるに似たり。	由井が浜、三浦のかた、他
	材木座の橋のたもと茶店	腰うちかけて見わたす景色まづすぐれたり。	海方向
1896 (宿りとするところ) 材木座光明寺の前	みながらにして鎌倉の海を一目望むべく、向には霊山崎につぎて江の島の浮べるあり、少し右にはなれて雲まに富士の聳ゆるあり、それよ長谷の村里、由井の松原、たゞ手にとる如く波をへだてゝ打ちむかはるゝもおもしろきに、南の方には伊豆の大島さへ、晴れたる日には鯨のしほふく心地して向ひたるよ。左の方に隣してつきいでし浦里は飯島とぞよぶなる。	鎌倉の海、霊山崎、江の島、富士、他	
渚(詳細は不明)	(夕刻に)染められて立てる富士、忽ち紫に、忽ち黒く、忽ち薄く、遂に姿をかくして止みぬ。	富士	

表-5 近代観光における滞在拠点

文献名	刊行年	滞在期間	滞在拠点	目的
鎌倉紀行	1876年	2泊3日	岩本楼	休憩
			堺屋平十郎	宿泊
			社前の逆旅角屋庄左衛門	食事
鎌倉日記	1889年	14泊15日	海浜院	宿泊
			蚤びす屋	食事
雪月花	1894年	29泊30日	前田喜八郎	宿泊
	1896年	19泊20日	材木座光明寺の前	宿泊

比寿屋」,「角屋」の3件は近世以前より継承されている老舗の宿屋である。

一方、『鎌倉日記』における「海浜院」とは、わが国初のサナトリウムとして由比ヶ浜に建てられた、所謂鎌倉における近代化の象徴といえる建築物である<sup>7)</sup>。筆者の奈良原時子は華族学校の友人・長与保子(海浜院創設に関わった長与専斎の妹)の紹介で海浜院に宿泊、鎌倉では学校の友人たちと海水浴や互いの別荘などと訪ねるなどして、日々「遊び暮らす」と記しており、東京での生活の延長として鎌倉に滞在していた様子が窺える。

滞在様式および滞在期間に着目すると、『鎌倉日記』では14泊15日、『雪月花』は1894年には29泊30日、1896年には19泊20日、と宿泊拠点を1ヶ所としながら長期滞在している。これは、景観的観光資源において述べたように、近代化に伴い鎌倉が別荘地・保養地化したことで1つの拠点到長期滞在するリゾート型の観光形態が浸透したことに因ると考えられる。

以上より、滞在拠点は、近世の拠点と新たに近代に作られた拠点が共存しながらも、その滞在のあり方は近代以降に台頭した1ヶ所に長期滞在するリゾート型の観光形態が浸透していたことを捉えた。

#### (4) 観光経路

表-6に近代観光における観光経路を示す。

表-6より、各文献における鎌倉入、鎌倉出より観光経路に着目すると、1889年の横須賀線開通以前に記された『鎌倉日記』における鎌倉入は、国鉄東海道線藤沢駅より人力車で片瀬まで移動したことが記されている。鎌倉出は、北鎌倉周辺で人力車に乗った後、東海道線横浜駅より鉄道を利用したことが把握できた。

横須賀線開通後に執筆された『鎌倉日記』、『雪月花』では、鎌倉駅(鎌倉停車場)を鎌倉の玄関とする様子が捉えられた。

また、全ての文献において、鎌倉内の移動は人力車または徒歩であったことは捉えたものの、特徴的な経路は得られなかった。

この理由として、表-3より旅行者が鎌倉内の歴史的観光資源を多く巡っていないこと、表-5より1つの宿に長期滞在したことから、網羅的に観光資源を巡る必要性がなかったことが挙げられる。

以上のように、近代における観光経路は交通の近代化に伴い、鎌倉への出入については鉄道が利用され、鎌倉内の移動は人力車と徒歩で局所的になされていたことを捉えた。

#### 5. まとめ

本研究では、近代鎌倉の観光形態と古都観光の継承状況を、近代に執筆された地誌1文献、紀行文3文献の計4文献より捉えた。

歴史的観光資源では、金沢が鎌倉観光に帰属しなくなったことに伴う観光領域の縮小、旅行者が地元の案内人の薦めに従うがまま赴くに留まっていたことより、鶴岡八幡宮などの有名な拠点のみが着目されるような観光形態であったことを捉えた。

景観的観光資源では、視点場については近代以降の別荘や保養地文化の台頭を受けて宿屋などの滞在拠点多く抽出される傾向がみられた一方で、視対象については山や岬などの不変的な地形

表-6 近代観光における滞在拠点

		鎌倉入	鎌倉出
鎌倉紀行	1876年	藤沢駅→人力車→片瀬	北鎌倉周辺→人力車→横浜駅
鎌倉日記	1889年	鎌倉駅	鎌倉駅
雪月花	1894年	鎌倉停車場	—
	1896年	—	—

要素を眺望していたことより近世観光が継承されていることを捉えた。

滞在拠点では、近世の拠点和新たに近代にできた拠点が混在しながらも、1ヶ所に長期滞在するリゾート型の観光形態が浸透していたことを捉えた。

観光経路では、鎌倉への出入には近代に敷設された鉄道が利用され、鎌倉内の移動には人力車と徒歩が中心であり、特徴的な経路が得られなかったことを捉えた。

以上のことより、近代鎌倉における観光形態は、鉄道敷設などの近代化の影響を受けて金沢が鎌倉に帰属する観光領域より外れたことに伴う観光領域の縮小に加え、景観的観光資源、滞在拠点が歴史的観光資源より乖離したことによって、歴史的観光資源そのものを巡る件数も大幅に減少した結果、古都の面影を巡る「古都観光」が衰退したことを捉えた。

今後の鎌倉における「古都観光」を考える際には、古都に関する事物やいわれなどから現存する歴史的観光資源同士の空間的な繋がりを把握した上で、「巡らせる」ためのモデルコースを設定するといった、仕掛けづくりを行うことが求められる。

これは近世にみられた懐古的な観光形態をただ踏襲するのではなく、伝統的な観光地における空間的な魅力を歴史的視点より読み解いた上で、観光計画を立案するための方法論であり、京都や奈良といった他の「古都観光」や城下町や重要伝統的建造物群保存地区などの歴史地域における観光計画への活用が期待される。

#### 補注及び引用文献

- 1) 鎌倉市ホームページ：武家の古都鎌倉 世界遺産登録をめざして、  
<[http://www.city.kamakura.kanagawa.jp/sekaiisan/index\\_02.html](http://www.city.kamakura.kanagawa.jp/sekaiisan/index_02.html)>,  
2011.12.21 更新, 2012.8.20 参照
- 2) 押田佳子 (2012)：徳川光圀『鎌倉日記』にみる近世鎌倉の観光および景観資源の発掘に関する研究：ランドスケープ研究 75(5), 373-376
- 3) 加藤理 (2002)：<古都>鎌倉案内：洋泉社, 44-58
- 4) 押田佳子・横内憲久・岡田智秀・瀬畑尚紘 (2011)：紀行文より捉えた近世鎌倉における観光経路および滞在拠点の成立過程に関する研究：ランドスケープ研究 74(5), 431-436
- 5) 押田佳子・横内憲久・岡田智秀 (2010)：十返舎一九『金草鞋』を通じてみた近世鎌倉観光における通過地点の景観構成とその鑑賞携帯に関する研究：ランドスケープ研究 73(5), 519-522
- 6) 鎌倉市史編さん委員会 (1994)：鎌倉市史近代通史編：吉川弘文館
- 7) 島本千也 (1993)：鎌倉別荘物語—明治・大正期のリゾート都市—
- 8) 島本千也 (1988)：鎌倉・都市の記憶
- 9) 下村彰男 (1998)：自然とのふれあいからみた自然風景地の空間計画：ランドスケープ研究 62(2), 99-101
- 10) 鎌倉市史編さん委員会 (1985)：鎌倉市史近世近代紀行地誌編：吉川弘文館
- 11) 大橋良平 (1912)：現在の鎌倉：通友社, 49-77
- 12) 平野栄 (1876)：鎌倉紀行、鎌倉市史近世近代紀行地誌編：吉川弘文館
- 13) 奈良原時子 (1889)：江の島紀行、鎌倉市史近世近代紀行地誌編：吉川弘文館
- 14) 大和田健樹 (1894/1896)：散文韻文 雪月花、鎌倉市史近世近代紀行地誌編：吉川弘文館
- 15) 表中の地名は本文ママ。本文中における地名は全て現在の地名に準ずる。